

オオウバユリ

Lilium cordatum var. *glehnii*

ユリ科

名前の由来

花の咲く時にはたいてい葉が枯れていることを、娘が花の18歳になった頃には娘を育てた女は齒(葉)の抜けたうばになるということからたとえられた。漢字名：大姥百合

形態的特徴

大型で高さ1~1.5mになる。葉身は長さ20~30cmで卵状長楕円形、基部は心形になり、長い柄をもつ。花は淡黄色で、長さ8~12cmほどの半開きの筒状。10~20個の花が茎の上部に横向きにつく。類似種：特になし



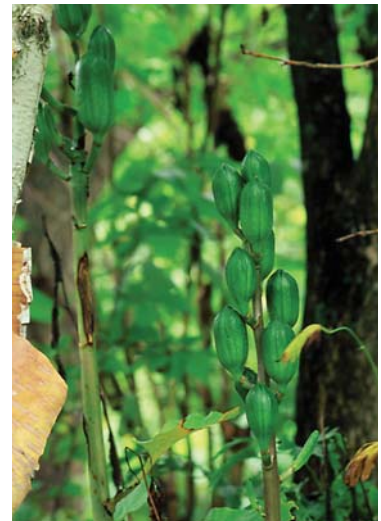
オオウバユリ



オオウバユリのつぼみ



オオウバユリの花



オオウバユリの実



オオウバユリの若芽

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期				■								
結実期					■							

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ

生育環境・分布

低地～丘陵地などの、やや湿った薄暗い林内に生育する。

分布：国外分布は、南千島・樺太。

国内分布は、本州中部以北から北海道。

北海道内分布は、全道。

十勝地方では、低地～丘陵地のやや湿った薄暗い林内に生育する。しばしば小規模に群生する。



オオウバユリ。群生している様子

生活史

開花時期：7～8月

開花までの年数：不明

寿命：多年草。

他生物との関わり

花には虫が訪れる。ルリタテハの幼虫の食草となっている。

興味深い話

■オオウバユリは芽生えてから10数年かけて葉を一枚一枚増やしていき、5～7枚に達すると、翌年花茎を上げて開花する。このとき長年かかって地下の鱗茎にたくわえてきた貯蔵物をほぼすべて使い切ってしまうため、開花後、鱗茎とその個体はなくなる。つまり10数年かけて成長し、たった一度開花してその個体は死ぬことになる。しかし多くの場合、花茎の基部に小さな鱗茎が1～数個残されるため、株としては生きのびる。

■山菜としては鱗茎や若芽が用いられる。鱗茎は一枚ずつはがして塩ゆでにした後、あえものや煮物にするとおいしい。また鱗茎をすりつぶして得たデンプンは良質で、団子などもできる。若芽はよくゆでてから水にさらし、おひたしやあえものに使う。鱗茎の採取は、必要最小限にとどめたい。

■十勝地方などのアイヌ語では「トゥレブ」という。

■アイヌ語では根(鱗茎)を指して、トゥレブ(溶け・させる・もの)と呼ばれる。

■アイヌの人たちにとってはキト(ギョウジャニンニク)とともに重要な食料源であった。鱗茎からデンプンを採り、乾燥して保存食としていた。

■デンプン採取方法は、7月ころに採集した鱗茎の鱗片をはがしていいねいに洗って桶やうすなどに入れてつぶす。

これを樽に入れフキの葉で包み発酵させる数日間おいて発酵したら水を張り、繊維とデンプンを分離する。繊維質はドーナツ状にかためて乾燥する。これをトゥレブアカムといい、繊維質とデンプンが混じった保存食となる。デンプンの方は数回水出しした後、上部に二番粉、下部に一番粉が分離するので分けて採取し、それぞれ乾燥して保存する。一番粉はきれいなデンプンで、腹下ししたときに水でといて飲むとよいといわれていた。

■食べる時はオントウレブアカムを削って水に浸し、上澄みをながしてドロドロにする。これを食べる寸前のお粥に流して食べたという。



オオウバユリ。花の後

配慮事項

生育している環境全体が重要である。

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ

参考文献

「改訂版 牧野新日本植物圖鑑」牧野富太郎 北隆館 1989
「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001
「日本の野生植物 草本Ⅰ」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982
「新版 北海道山菜図鑑」佐藤孝夫・小林隆正・久保秀樹 亜細亜社 2002

「森林で遊ぼうシリーズ3 おもしろい草花の話」北海道立林業試験場 北海道林業改良普及協会 1998
「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館(編)、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004